

【今日の説教から】

17章にて、わが子の誕生のお告げを頂き、どうして百歳の自分と九十歳の妻のもとに子が生まれようかと笑い、妻もまたその知らせに苦笑したのです。しかし果たして神様のおっしゃったとおりにイサクが生まれました。神様は人知を超えた御業を昔も今もなさるお方です。

そしてその折角授かった愛息を全焼のいけにえとしてささげよとのお告げがあります。何という残酷なお告げでしょうか。ここに来て、喜んで育てたわが子を屠れとは、子孫を増やすために子を与えられたのに、その言葉は嘘だったのかと、耳を疑う神様の言葉でした。「神はアブラハムを試みて彼に言われた」。どうして神様は彼を試す必要があったのでしょうか。神様はご自分のみ告げを一笑に付した彼への意趣返しをしようとされたのでしょうか。

しかし彼はここで何の不服も表わさず、何の問いかけもせず、翌朝早く起きて黙々とその命令に実行しようとします。そしてそのいけにえの場所に着き、息子を縛って薪の上に置き、イサクも従います。

しかし神様はイサクに危害を加えることをお許しにはなりませんでした。

「あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」そしてイサクの代わりに一頭の雄羊。これはまさに私たちのために身代わりのいけにえであるイエス様をくださった神様の物語なのです。

皆様おはようございます。先週は暖かな一週でしたが、今週はまた寒さに向かうようです。皆様この寒暖の差のある日々、どうぞご自愛ください。

さて、飛び飛びに創世記を読み進めております。

前回は15章より、主のこの言葉がありました。

「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであろう」。

力強い主の宣言です。私たちが到底数え上げることのできない、空の星、地の砂粒。足元から空の高みに至るまで、ありとあらゆるもの、森羅万象をお造りになられた方が私たちを見ておられ、守っておられ、盾となり、恐れるなど語られるのです。主にはご計画がおりです。祝福の言葉をよそに、アブラムは、そんなに与えていただいたところでその財産は所詮しもべの子らに継がれるだけだとがっかりしますが、主はあなたに子を与えると約束されます。しかし彼は一瞬信じてみてもなお、まだ疑いの中にありました。しかし神様は、そのひとたびの信仰を彼の信仰と喜んでみなして彼を義、正しいものと認めてくださいましたが、私たちの信仰とは、そのように私たちを愛してやまないお方の愛の裁量の中で、高下駄をはかせていただいて成り立っているものなんだなあをつくづく知らされます。

15:8 彼は言った、「主なる神よ、わたしがこれを継ぐのをどうして知ることができますか」。すぐに口をついて出るのが私たちの不信仰の言葉です。そのために主は、さっきまで生きて歩いていた様々の生き物を二つに裂いて、その命を奪って彼に主が生きて姿を現し、二つに裂きたいけにえの間を通ってご自分の契約を守ることを誓われました。

その後アブラムが99歳の時、主は彼に現れて言われます。そして彼はまたもこのような反応を示します。

17:16 わたしは彼女を祝福し、また彼女によって、あなたにひとりの男の子を授けよう。わたしは彼女を祝福し、彼女を国々の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王たちが出るであろう」。

17:17 アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で言った、「百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなって、どうして産むことができようか」。

そしてそれは妻サラにおいても同じでした。

18:10 そのひとりが言った、「来年の春、わたしはかならずあなたの所に帰ってきましょう。その時、あなたの妻サラには男の子が生れているでしょう」。サラはうしろの方の天幕の入口で聞いていた。

18:11 さてアブラハムとサラとは年がすすみ、老人となり、サラは女の月のものが、すでに止まっていた。

18:12 それでサラは心の中で笑って言った、「わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみなどありえようか」。

18:13 主はアブラハムに言われた、「なぜサラは、わたしは老人であるのに、どうして子を産むことができようかと言って笑ったのか」。

18:14 主にとって不可能なことがありますでしょうか。来年の春、定めの際に、わたしはあなたの所に帰ってきます。そのときサラには男の子が生れているでしょう」。

18:15 サラは恐れたので、これを打ち消して言った、「わたしは笑いません」。主は言われた、「いや、あなたは笑いました」。

人が、神様のなさることにケチをつけてナンセンスなことだと決めつけて一笑に付すのです。これが私たち人間。「主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。」とは言っていただきましたが、弱き弱き人間の真相です。

果たして主の仰せの通りに子が生まれました。

21:1 主は、さきに言われたようにサラを顧み、告げられたようにサラに行われた。

21:2 サラはみごもり、神がアブラハムに告げられた時になって、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。

21:3 アブラハムは生れた子、サラが産んだ男の子の名をイサクと名づけた。

21:4 アブラハムは神が命じられたように八日目にその子イサクに割礼を施した。

21:5 アブラハムはその子イサクが生れた時百歳であった。

21:6 そしてサラは言った、「神はわたしを笑わせてくださった。聞く者は皆わたしのことで笑うでしょう」。

神様は実に不遜な不信仰により神様の御思いを一笑に付すような人の暗い思いを赦して人に望外の喜びの笑いを与えてくださるお方です。

そして22章。主はそんなアブラハムを試みて彼に言われました。

22:1 これらの事後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにおります」。

22:2 神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。

アブラハムは愕然としたのではないのでしょうか。子を与え、相続すべき子を与え、一時喜ばせ、この成長を喜び、可愛がり育てたのに、ここに来てその子を全焼のいけにえとしてささげよとは。全く理解不能で残酷で、矛盾していて、悪意さえ感じられるようなこのみ告げ。彼はかつて「主なる神よ、わたしがこれを継ぐのをどうして知ることができますか」と答えた、理屈っぽい、頑固な人でした。ここでは到底受け入れられないこの神様の言葉に彼はどう反応したのでしょうか。

22:3 アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクとを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた。

彼は不思議と、神様には何一つ不平を言いませんでした。全く理解不能であったにもかかわらず、彼は神様に質問をせず、言い返さずに、それも朝早くにイサクと、彼の供のものと共に出発するのです。彼はもろもろの神様からの信仰の訓練によって育てられていたのでしょうか。

22:4 三日目に、アブラハムは目をあげて、はるかにその場所を見た。

わが子を屠るための旅。それは三日にも及ぶ旅でした。何度引き返したいと思ったことでしょうか。しかし彼は引き返しませんでした。そしていよいよその執行の場所が遥かに見えて

きたのです。彼はどんな心境だったのでしょうか。

22:5 そこでアブラハムは若者たちに言った、「あなたがたは、ろばと一緒にここにいなさい。わたしとわらべは向こうへ行って礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰ってきます」。

アブラハムは不退転の決意で臨みます。その祭壇のところで、供の者がアブラハムがイサクを手にかけるのをやめさせないために、供の者は途中で待たせるほどの徹底ぶりであったに違いありません。

22:6 アブラハムは燔祭のたきぎを取って、その子イサクに負わせ、手に火と刃物とを執って、ふたり一緒に行った。

この木がかわいらしい愛息である彼の肉を焼き尽くすのです。その自分を焼き尽くす日の燃料となる木々をイサク自身が運ぶのです。どことなく、主イエス様が、ご自身の磔刑の十字架の横木を担いで歩かれたことを想起させます。

「ふたりは一緒に行った。」6節と8節に二度繰り返されるこの言葉。行きは二人で帰りは一人。何とも切ない父の心を思い起こさせる言葉です。二人の共に歩む最後の時を思わせま

す。
アブラハムの手の中には、愛息を屠るための刃物と、焼き尽くすための火種が握られていました。

22:7 やがてイサクは父アブラハムに言った、「父よ」。彼は答えた、「子よ、わたしはここにいます」。イサクは言った、「火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」。

賢い子です。木々も背負うことが出来ましたし、屠るための動物が不足していることにも気づいていました。このように賢く、愛らしい、この成長した和田子と、ここでお別れをしなければならないのです。

22:8 アブラハムは言った、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」。こうしてふたりは一緒に行った。

この後の、「主の山に備えあり」に結果的につながっていく彼の言葉です。ここでは、その時までイサクに恐れを抱かせないための方便のように語られた言葉に違いはないのですが、

神様は本当に、彼に二人のために、「神みずから燔祭の小羊を備えて」下さるのです。「お父さん」、そして「子よ」という二人の語り掛けが切なく私たち読む者の心に迫ります。

22:9 彼らが神の示された場所にきたとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた。

ついにその場所に着き、彼はイサクには何も言わずに彼を縛って薪の上に載せます。イサクもまた父に対して何も言いません。反抗も拒絶もしません。どうしてでしょうか。恐ろしくなかったのでしょうか。何事が起っているのか。自分は殺されて全焼のいけにえにされるのだろうか。それでもなおお父さんを信じ続けることが出来たのでしょうか。

22:10 そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした時、

22:11 主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼は答えた、「はい、ここにおります」。

22:12 み使が言った、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」。

神様は使いを送り、御使いは「アブラハムよ、アブラハムよ」と二度呼びかけました。

待ちなさい、待ちなさいと、急いで繰り返し名前を呼ばなければ、彼は本当に息子を手にかけてしまうような気迫だったのではないのでしょうか。

神様は、「あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」と語られました。

新約聖書ヘブル書には、この時のアブラハムの心境を、次のように語っています。

11:17 信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。

11:18 この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。

11:19 彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。

22:13 この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた。

角とは、力の象徴としてしばしば語られます。そして一頭の雄羊。その羊は藪に自分の角を捕らえられ、藪に、象徴的にその力の源である角を掴まれ、身動きが取れません。彼は弱くされ、彼は捕らえられ、彼は身代わりとしていけにえになります。ここには新約聖書のメッセージがあります。ここにイエスキリストがおられます。

ヨハネ 1:29 その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。

イザヤ 53 章

53:1 だれがわれわれの聞いたことを／信じ得たか。主の腕は、だれにあらわれたか。

53:2 彼は主の前に若木のように、かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。

53:3 彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

53:4 まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。

53:6 われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。

53:7 彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。

53:8 彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。

53:9 彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。

53:10 しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。

53:11 彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。義なるわがしもべはその知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。

53:12 それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に／物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。

「あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」。

否、否、イエス様の出来事を通して、私たちが、神様は「あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまない」方、「雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭として」捧げる方であることを私たちが知ったのです。

22:14 それでアブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。これにより、人々は今日もなお「主の山に備えあり」と言う。

主はそこに姿を現され、私たちは主を見たというのが直訳です。
私たちはそんな主の愛のご真実を、私たちの人生の津々浦々で目撃するのです。

ヘブル 11:1 さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。

11:2 昔の人たちは、この信仰のゆえに賞賛された。

11:3 信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである。

11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。

11:8 信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。

11:9 信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。

11:10 彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である。

11:11 信仰によって、サラもまた、年老いていたが、種を宿す力を与えられた。約束をなさったかたは真実であると、信じていたからである。

11:12 このようにして、ひとりの死んだと同様な人から、天の星のように、海べの数がたい砂のように、おびただしい人が生れてきたのである。

11:13 これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした。

11:14 そう言いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示している。

11:17 信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。

11:18 この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。

11:19 彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。人知を超えた素晴らしい御業をなさる神様、あなたは時に私たちを試みるかのように、私たちを理解不能な困りごとの中にお導きになられますが、それは私たちのための信仰の訓練であり、あなたの犠牲と愛とを身をもって教えていただく恵みの時となることを知り、本当にありがとうございます。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン